

素溶液を用ふるのである。
乾燥標本とはどんな物か、之を例を以て説明しようなら、「ベスト」に就きてでも、いゝがそれよりか品の變たものからよ。

今結核患者の咯痰より乾燥標本を作つて見よ、充分清潔にした「デッキ、ガラス」覆蓋ガラスを一枚取つて、これに咯痰の一部分を少しばかり着け、其上を他の「デッキ、ガラス」で截ふて上下より指間ですりつけ、充分に薄くのばしたる後、一枚の「デッキ、ガラス」を引いて取り去り、あとは、痰の着いた面を上に向けて暫時放置し、次に「ピンセット」でもつて、これを挟みて、やはり、痰の付着したる面を上にして、「ガスランプ」なり「亞爾爾保兒ランプ」なりの燭上三四寸ばかり上の處で徐々に、横過せしむること二三回なれば、蛋白質が凝固する、そこで、これを染色液の内に入れて種々に染めるのである、とふして、終に「オペクトガラス」にのせて、顕微鏡下に照らし見るのである、まわくざつとこんなものである。

社會事績

人力車廢止論

國府犀東

人力車廢止の説は、久しく之を耳にす。然り文明の完成は、

確かに人力車の爲めに、其一部を妨害せらる。人力車廢止せざるべからず。若し夫れ之を人格の上より見る。同等の人類にして、牛馬と同じく人の爲めに、交通の器具となる、車夫其者の如き、極めて奇怪なりとせざるべからず。動力を人力に資り、由て以て交通の具を濟す。此の如き不修理、不平等は、苟くも人格の尊重すべきを知る者の斷じて排斥すべき所たり。何が故に、我邦人は、人力車其者を見て、毫も奇怪の感となさざるのみならず、寧ろ却て正當にして便益ある、交通機關なりとするの觀あるや。

現今の状況に於ては、人力車其者、寔に輕便なる交通機關也。蒸氣力による汽車、電氣力による電車、俱に鐵道を敷設するの設備を要す。馬力によれる馬車、是れ亦馬を養ひ、馬丁を附するの煩あり、牛力による牛車、是れ單に荷物を運搬するに用ゆべくして、個人の交通器具たるに適せず。若し夫れ驢車、馴鹿車、若くば象車、羊車等、古來用ゐられし動物車を擧ぐるも、皆我邦に適當ならず。獨り人力車あり、動力を人の勞力に資りて運轉す。是れ我邦に於て、最も輕便なるを失はず。されど同じく人力を以て運轉すれども、自ら自己の力を以て運轉せしむる自轉車の如き、近來大に我邦人の採用する所となりしは、極めて祝すべき現象也。されど未だ直ちに之を以て、人力車に代用し得べからざる事情の存するは蓋し社會の一不幸といふべし。

三十年來、我邦は人力車の便益を受けぬ。之に關する庶般の設備は、最近數年間に至りて、極めて完全の域に達したり。人力車夫は、既に社會の一階級を作り、勞働の一組合

を成せり。封建時代の駕籠屋、雲助の如く、人力を以て交通の具となすの一社會は、再び新に打立てられぬ。かゝる社會が打ち立てられ、凡ての設備が完整せられ、人力車其物の構造、体裁、裝飾、附屬品に至るまでも、凡べて著しき進歩をなし、動力たる車夫も、組合をなし、帳場をなし、賃銀を一定して、需要者、使用者の便を圖るに至りし爲め、人力車の輕便利益は、殆んど一般に認められ、遂に方今交通上の最必要具と見做さるゝに至れり。馬車の使用者は、生計の程度、極めて高き者に限られ、其れより以下、中等社會の大多數は、皆な人力車の使用を必要とす。中等社會以上にして、馬車を使用するの費に耐えざる者も、概して使用を人力車に待つ。是に由て之を見れば、方今個人交通の具として、最も多く大多數に需要せらるゝ者は、確かに人力車たる也。

此の如き大多數に需要せらるゝ人力車は、中等社會中の、稍生計に餘裕ある者以上在りては、所謂「抱へ車」に於て、個人使用の交通具として各使用者に所用せらる。隨て其動力たる車夫も、一定の賃銀、手當を受けて、特別の個人に從屬の干繫をなす。「抱へ車」を有し「抱へ車夫」を置くの資なき者は、所謂「帳場」と特約し、若くば之に申入れて、使用の必要ある毎に、其人力車と、其車夫とを雇ひ來り、概して一月一回、其使用料、及賃銀等に就き、「帳場」より請求し來る金額に應じて、之を支拂ふ。其他最多數の使用者は、到る所の街衢に就き、所謂「辻車」を拾ひ、使用の必要あるとき、直接車夫との間に、距離と賃銀との協定をなし、使用して到着地に至り、直ちに之を支拂ふ。此三種の車と車夫とは、其

設備方今極めて完備の狀を呈し、資力ある者は、概して「抱へ車」を置き、其次は「帳場車」を使用し、其他は凡て「辻車」の使用によりて、交通の便を濟す。此等使用者と、被使用者との間に於ける、凡ての干繫が、かくも完備せる有狀に在るだけ、それだけ多く人力車の便益は、一般に承認せられ、最早や此需要を防止するを得ずなりぬ。

今夫れ自轉車は、極めて輕便なり。便益の點よりせば、人力車よりも、更に大なる者あらん。而して之を使用するの技術も、亦さは難事にも非らざるが如し。されど近來に至り俄然其盛んに使用せらるゝを致たせしにも拘らず、尙ほ人力車に對する、大多數の需要を排して、偏ねく之を採用せらるゝに至らざるは他なし。人力車を需要する大多數は、自ら車を造り車夫を置くの資なき者なるが故に、隨て車を製造するよりも、更に高價なる費を投じて、自轉車を買ふは其必要を感せず。又車を所有し、車夫を置くの資ある者は、自轉車を不体裁とし、又其自力を以て運轉するの技術は習ふを好まざる爲め、亦之を採用せず。此の如き事情の下に、便益なる自轉車も、尙ほ一般に使用せられずして、依然として、人力車使用の盛大を致すは、蓋し我邦の一大不幸といはざるを得ず。

言ふまでもなく、人力車其者は、輕便也。されど人力を動力として、車夫を使用するは、極めて不幸の事也。幼者老者は、他の生産事業の、重要な業務に従事するを得ざると同じく、車夫としても不適當也。最も車夫として適當とせらるゝ者は、身體強健、氣力旺盛の壯丁也。之を擧げて他の生

産業、若くば製造事業に使用するを得ば、是れ社會の慶ならん。たゞ一時労働社會に、賃銀の低落を來たすを免れずとするも、富の機關が、將來益廣大せらるべくして、強健なる労働者を要すると、益多きに至る社會の進運に就て考うるべきは、早晩社會に、此の如き不生産的の労働者を、而かも極めて多數、單に個人交通の具として、其勞力を提げしむる如き愚を許さざるの時期に達すべく、隨て此等不生産的の労働者が、擧げて其業を生産的労働に轉ずるに至るを歡迎するの目も遠からざらん。然らば此等方今必要の交通機關に唯一の動力たる車夫をば、此不經濟なる交通社會より導き去るに對し、其代として方今人力車に於けると同等若くは更に優等の便益を與ふる、一の新動力車を、供給するは、固より必要也。

自轉車の使用者は、自轉車を使用して可也。方今人力車の使用者に對しては、理學者、工學者は、斷じて新動力車を發明して之に供給するの義務を負ふべき者也。若し夫れ此新動力車にして發明せられ、人力を要せずして、方今と同等若くは優等の便益を、今の人力車使用者に與うるを得、而して此人力車の動力として使用せらるゝ、凡ての車夫、即ち社會に於ける壯丁の一大群集を驅て、之を富の機關に於ける、生産的労働に従事せしめば、國家進運の發展を助くるに於て、其裨益極めて大なるべきのみならず、又國富民富の幾分を助くるの、一大援軍とならん。歐米各國に於ては、同等の人類を富の機關に使用し、全く器械の一部分たらしむるすら、之を不修也とし、所謂労働問題さへ、今に生産社會の一問題と

なり居れり、然らば我邦の如き、單獨に個人交通の具として貴重なる人類を使用し、用者被用者共に之を奇怛とも感ぜざる如きは、歐米に比して、更に不條理の甚き者とせざるべからず。況んや此等車夫として生計をなす社會は、其業の既に不生産なるが其上に、壯丁を以てして、徒らに一種遊惰の民たるに甘んじ、社會に倦怠放漫なる一階級を形成するをや、同等の人にして、人の器具に使用せられ、牛馬と同じく驅け廻はるの、獨り大に人格を卑屈にするの害あるのみならず、又社會の勤勉剛健を沮喪するの、一原動力ならずとせず。社會に車夫の如き、卑屈にして遊惰、不生産的にして不條理なる、一種労働者の、一大群集あるは、是れ亡國の兆也。人格を無視せられて、人の驅使に甘んじ、牛馬と同じく走る。是れ奴隸也。奴隸は文明の許さざる所とせば、車夫其者も、亦文明社會に否認せられざるべからず。否認せられざるべからざるが故に、之を救ひ出して、他の生業に轉就せしめ、人力車其者を廢止して、代うるに同等若くは更に優等の便益ある、新動力車を供給するの必要あり。車夫を救ひ上げて、之を轉業せしめざるべからず、隨て新動力車を發明せざるべからず。而して馬車、自轉車と、相待て個人交通の用を濟せしめざるべからず。何が故に理學者、工學者は、一も此等の新動力車を、社會に供給すべき義務あるを知らず、此文明に銳意しつゝ、ある我邦をして、今にかゝる不生産的にして、又不條理なる交通具を使用せしめ、茫然として之を默視し居るや、其無責任の甚しきに驚かざるを得ず。

昨月の末、米國桑港にユニヴァサル自轉車製造會社特派

員、我邦に渡來し、其所謂自轉車なる者を紹介しぬ。而して當時の新聞紙は、此に就き其概要を載せり。此自轉車は、最初巴黎にて發明せられしも、機關を車の後邊に附着するの構造にて、僅かに二三人を乗する馬なき馬車たるに過ぎざりしかば、單に上流人士の虚飾物たるに止まりき。ユコヴァサル會社々長ウヅレー氏は、昨年十月を以て、更に新自轉車を發明しぬ。是れ發動機關を、車の前部に附着するの構造なれば、坂又は多少傾斜せる道路も、容易に馳走するを得ん。且つ從來の者は、發動機を電氣に取りしも、新自轉車は、電氣、蒸氣、瓦斯、アツセトリン、ナツプサリ、ガアンリン等、何れにても運轉し得る者なり。就中最も低廉なるはガアンリンにして、六十哩を走るに、僅々十錢を費すに過ぎず。又該自轉車は、優に五十噸の重量を運搬して快駛するを得、又此機械を、普通一般の荷車に附着するにも、僅々五分の短時間を要する者なれば、其輕便なるは言を待たずと云ふ。されば戦時に於ては、最速力、一時間五十二哩を走るが故に、馬の如く射殺さるゝとなくして、迅速に糧食兵器等を運搬することを得べし。而して平時近距離間の使用に於ては、流車の如く鐵路を要せざれば、勿論流車よりも輕便なりと。

されば新動力車の一は、既に巴黎にて發明せられ、昨年十月頃、更に米國にて、新發明を加へて、之を大成したる者の如し。されど其未だ一般に使用せらるゝ程、輕便なる構造を以て、製出せらるゝに及ばざるは惜しむべし。其價格といふを聞くに、發動機共に、二千五百圓、乃至三千圓を要せざれば、十二人、乃至十五人を乗車せしむるの自轉車を求む

るを得ず、二人若しくは四人乗りの者を以てするも、尙ほ七、百圓餘を要すといへり。一個最低額七百圓、是れ獨り我邦の如き、生計の程度、未だ高からざる社會に、不適當なるのみならず、又列國の多數人民に使用せらるゝと、現今の自轉車若くは我邦の人力車の如き、廉價なるを得ざるべし。國外の事は、姑らく措き、我邦に於て、現今の人力車を全廢して、之に代用すべき交通具となさんとするには、此の如き高價の者にては、勿論不適當なり。

新動力車、方今に使用せらるゝ者、往々にして之を聞く。獨逸皇帝は、自動車を使用し給ふといへど、其動力は何に資りて構造せられしやを審にせず。又近來我市内の途上に、石油機動器の作用を以て、自動車を使用せし外人ありしといへり。其他麻布邊に住する某氏、亦荷物運搬に於ける、自轉車の研究に従事しつゝあり、極めて好成绩を得たりとのと、昨年秋の新聞に散見せしとあり。されど人力車に代用すべき、新動力車は、高價を以てするも妨げなしといふならば、先づ米國發明の自動車、最も完備せりとすべきのみ。

スプリング及空氣力は、未だ米國發明の自動車に應用せられざるが如し。而して第二十世紀の新動力は、顧念ふに電氣より、更に一步を進めて、空氣力を應用するとならん。されば、米國發明の高價なる自動車よりも、更に進歩せる廉價なる自動車の發明し得られざるを斷言し難し。我邦の如き、特に廉價にして輕便なる者を要する我國に於ては、理學者、工學者は、更に一新研究を加へて、直に外人をして、後へに瞻若せしむるの抱負なかるべからず。人力車製造費平均四十

圓、車夫雇費平均一年百圓、合計百四十圓となる。少くも此と同等の價格を以て、製出せられずんば、自動車も、直に我邦に使用せられ得べからずして、人力車の全廢は、則ち直に實行し得ざるべし。廉價にして輕便、馬車に代へ、人力車に代ふべき者は、理學者、工學者の考を要す。

車夫は、文明の妨害をなす、社會の不生産的、不條理なる一種労働者の群なり。車夫をして轉業せしめんには、必らずまた新動力車の供給を要とせん。吾輩は、自轉車の、益一般に廣く使用せらるゝを切望すると同時に、又速かに自動車に、之れと相待て使用せらるゝを見んとを期す。終に一言せん。自動車の廉價なる者に就ては、吾輩久しく其必要を知り、夙に之れが研究に従事しつゝありしが、既に一定の成績を得て、恐らくば米國發明の者よりも、更に嶄新ならんことを信ずと雖ども、未だ之を發表するの時期に達せざるが故に、暫らく之を佗日に譲るとせん。無責任に、人力車を廢止せよといふに非ずして、代用すべき者の研究に従事しつゝあるは、茲に一言せざるを得ず。

北海道に於ける無言の行者

(接前號)

貴族院書記官 金山 尙志
 函館 修院

トラピストの本院は佛國に在り、各地に分院を置き、歐亞諸

修院の行者

現在の行者は總て十九名にして、本邦人あり、佛蘭西人あり、和蘭人あり、以太利人あり、亞米利加人あり、又其年齡を異にし、少年あり、壯年あり、老年あり、雜然一家を成すと雖も、相敬し、相愛し、頗る親密の生活を爲し、院長を父と唱へ年長者を兄と呼び年少者を弟と稱へ居れり、彼等の祈禱服は白羅紗にして、其領首に頭巾様の物を附着し、勞働服は白

き毛衣にして頸より踵まで垂下し、其上に黒羅紗の長衣を穿てり、帯は革にして幅三四寸のものを用ひ、外出の時には大なる木履を穿ち、務めて質粗を旨とせるものゝ如し。

院長プリエ氏の素性

各修院に一名の院長あり、院内の庶務を總理するに、行者を指揮監督するの任を有す、函館修院の院長はフランソワ、プリエと云ひ、佛國人なり、二十歳にしてソメルウ井の宗教大學校を卒業し、次でバユ一神學大學校に入り、哲學物理學化學等を專攻し、千八百八十三年ブリツグベツクなる大修院に入り、農事を實習し、同院に副長たること四年、千八百九十六年十一月を以て、總長より日本國の新設修院長を命ぜられ、翌年一月本邦に渡來したる者なるが、函館を以て埋骨の地と定め、本邦に歸化して行者岡田初太郎の養子と爲り、頗る熱心に院務に執掌せり、院長は衆望を擔ふて之に當り、百般の事務を裁斷するの權ありと雖も、戒律、食事、寢具等渾て行者と異なること無く、只其胸間に懸けたる木造の十字架と、行者の之に對する深き尊敬とに依りて知らるゝのみ。

行者の姓名

行者の席次は、入院時日の前後に依り、次第に遞下せり、即ち

- 院長 佛蘭西人 フランソワ、プリエ 千八百五十九年生
- 副院長 同 マリエン、モニエ 千八百四十六年生

- 英領加奈多人 シヨゼフ、ボ 千八百五十九年生
- 佛蘭西人 エメ、ロビン 千八百六十七年生
- 以太利人 ジアン、マリー、マダレ 千八百五十七年生
- 和蘭人 ル子ワン、イウヘト 千八百七十四年生
- 佛蘭西人 マトウ、ドミユン 千八百六十年生
- 同 ジョアン、カズレ、フリ エキス、ロクトル 千八百五十九年生
- 同 モイゼ、マリー、シヨゼ フゴムレ 千八百四十九年生
- 同 ジスベン、ゼラール、ワンリール 千八百六十七年生
- 同 ジアン、マテヤス、ウ エセルス 千八百六十八年生
- 同 シアル、ウエセルス 千八百六十九年生
- 三十一一年四月 青森縣人 齋 藤 敬 吉 明治八年三月生
- 三十一一年六月 新瀉縣人 川 崎 幸 吉 明治十四年三月生
- 三十一一年六月 巖手縣人 新田 目 庄 助 明治十三年三月生